

眠むれぬ夜に



永岡 慶之助
(作家)

かつては、こうではなかった。夜、身体を横たえさえすれば、眠りに入れたが、今では、そうはいかない。なかなか寝つかれず、たとえ眠れても直ぐに目が覚めて、白々とした朝を迎えるのであった。

いつの頃から、枕もとにラジオを置き、スイッチを入れるようになった。

そうした深夜、ラジオのスイッチを入れたら、いきなり粋な都々逸と三味線の音が聞こえてきた。柳家三亀松の特集だという。三亀松は、粋な都々逸と三味線の物まねで聞こえた芸人である。お堅い放送局では珍しいものだと思うたら、意外にも、演題を「勸進帳入り」だといいい、突然、梵語・漢語入

り混じった長文の勸進帳を一瞬の淀みもなく一気に読みあげた。

これは団十朗の口跡の『ものまね』であろうが、みごとなものであった。

「聖武天皇の時代に建立された奈良東大寺の大仏が、平家の攻撃で焼失したから、復興するにあたり、寄進をお願いしたい。」という旨を、あなたかも巻物に書かれているごとく『弁慶』が、朗々とした声音でいうもので、役者の技量が問われる場面だ。

思えば、深川木場に生まれた、芸事好きな若者が、いろいろな職業を遍歴したあと、柳家一門に入り、三亀松の名でプロデビュー、都々逸と、巧みな三味線で売り出した。このような面白い

ものまねを、こなすとは思わなかった。

次はサンケイホールで収録したという、「明治一代女」であった。先ず、昭和の流行歌の名歌曲に数えられる、同名の主題歌を、これまた巧みに唄い、一転して同劇の山場である浜町岸の場面に移る。箱屋己之吉と芸者お梅のセリフの声色を、美事に使い分け、この場に至るまでの経緯を簡略に物語り、ついに己之吉殺しの終末をむかえる。この間、どれほどの時間であったろうか、一幕をみごとに活写し終えているのであった。

「明治一代女」は、明治三十年に東京日本橋浜町で、実際に起った事件を素材にした新派劇であるが、序幕での

新内の使い方、三幕目の義太夫の使い方、全体の音響効果などは、いわゆる二番目狂言様式といわれるほどの完成度で、後者のセリフ廻しに引き込まれる。

三亀松が、声と三味線だけで演じていた場面は、芸者お梅が、売り出し中の歌舞伎役者沢村仙枝の襲名披露の費用を、己之吉に工面してもらったにもかかわらず、己之吉の気持ちも無下にされたと詰られ、言い争いになり過つて短刀で刺してしまふ、物語のクライマックスである。三味線と声音の混然とした一体感で、思わず話に聞き入ってしまった。

三亀松は、晩年『池ノ端の師匠さん』と尊称されて終ったというが、彼独特の芸境を作りあげたといつていい。これなどは、思わぬ贈り物を受け取つたようなものであるが、いつもこうではない。

ラジオのスイッチを入れた途端に、耳もとで陽気なジャズが鳴り響き、いっぺんに眠けが消し飛んでしまふ。こ

れがウイスキーや、ブランデーを片手にというのなら悪くはないだろうが、夢うつつの間をウロウロしている際などは、いささか閉口なのである。

しかし、またある夜、スイッチを入れたら、水谷八重子の「大石内蔵助の妻りく」を演ずるといふ。これは二代目であろう。

初代水谷八重子といえ、花柳章太郎とコンビで、一世を風靡した新派劇の大女優で、私などが思い浮べるのは、「女婦系図」の『お薦』役である。彼女の娘である二代目は、良重といつたと思うが、同じ芸界に入りながらも、大女優の娘であるということが重荷であったのか、テレビ界で活躍していたが、その後、新派劇が衰退し、話題にものぼらなくなり、私は忘れていたが、水谷良重が二代目を継いだことを知った。

その二代目の名を久しぶりに聞いたので、夢うつつの中で、思わずきき耳をたてた。これは、水谷八重子の独り語りと言おうか、独り芝居と言おうか

——亡き夫・内蔵助と共に討ち入りした息子ちから主税を忍ぶ、りくの心境を語っている。

赤穂浪士の討ち入り事件は、武士道の鑑のように言われているが、赤穂藩の家族・とりわけ女房子供たちの、その後の生活や一生を左右した。徳川幕府の一番華やかな元禄時代に、苦汁を飲んで大石家をささえてきた『りく』の長男主税を失った悲哀を表した語りである。討ち入り太鼓を連想させるコトコトと小刻みに鳴る音は、何を使った擬音であるか、その効果もよろしく、しみじみとした語りとなっている。りくは六十八歳で亡くなっているが、当時としては長生きの方である。二代目水谷八重子も、その年齢を過ぎて、もはや先代を重荷に思わなくてもよいほどの、芸域に達している出来ばえであった。

眠れぬ夜の、きまぐれなりスナーである私が、次に出会う番組の作品は、どのようなものか、楽しみである。

TAXI



山本千明

(ECC英会話講師)

伊勢市駅の構内、幼い二人の娘を連れてたまま、呆然と立ち竦む私が居た。ドックンドックンと早鐘のように打つ自分の心臓の音が聞こえる。

久し振りの旅行だった。日々仕事に追われる夫が「所用で伊勢に行く」という話には私は飛びついた。そこには私の大学時代の親友がいる。才二子出産後間もない彼女に会いたい気持ちは募ったが、一才と四才の娘二人を抱えて知らない土地に行く自信はない。しかし夫が用事を済ませている間に彼女の所に行き、行き帰りだけは付き添ってもらえたら心強い。

大坂の弁天埠頭に向う高速艇の中では、私も娘も躁いでいた。初日は娘二人と地元の水族館を楽しみ、そのまま親友の自宅を訪問。生まれて間もない男の子を抱っこさせてもらいながら、京都の学生時代の思い出を語り合っ

た。そして二日目。帰りに夫と指定の駅で待ち合わせの約束をして再び彼女の家にお邪魔した。笑いころげながらの楽しい時間はあっという間に過ぎ去って、約束の時間が近づく。私はタクシーを頼み、行き先を告げる。「伊勢市駅までお願いします」友人が「あれ？宇治山田駅じゃないの？」と訊いてくれたが、「待ち合わせは伊勢市駅なの」と自信満々で答えた。だいたい「宇治山田駅」なんてどこ？私は今朝二度も夫に確認したのだ。「伊勢市駅に行けばいいのね？」「そう」「念の為だけど、イ・セ・シ・駅だね？間違いないね？」「ないない」と軽く受け流す夫の言葉を固く信じて夫がまとめて持っている切符を確認しなかつたのだ。待ち合わせの十分程度前に指定の駅に着いたが、夫の姿はどこにもない。電車の発車時刻を見たが、今朝言われ

た時間に発車する電車すら見当たらない。もしか？と駅員さんに聞くと、やはりそれは「宇治山田駅」発の電車の時刻だと説明した。「なんで伊勢市駅だなんて言ったのよ!!」などと夫を責める手段も余裕もなかった。幸い伊勢市駅の前が宇治山田駅だという。ならばこの駅を通るその電車に飛び乗れば夫に会える！と娘の手を引いて駅員さんの教えてくれたホームに突撃。目の前に来た電車に飛び乗った、が、慌てすぎて私が乗ったのは反対側の電車だった。万事休す。夫と私はまたしても見事にスレ違ってしまったのだ。

こうなれば帰りの高速艇乗り場に行くしかない。何時発ということも確かめてなかつた自分が悔やまれるが、もうそこに行くしかないのだ。「おかあさん、お腹すいたあ」「おうちかえらう」と口々に言い始めた娘達の手をしっかりと握り「大丈夫だよ。一緒にお家に帰ろうね」とニコリ笑いかけた私の心情はちつとも大丈夫なんかじゃなかった。一番「おうち帰りたいよー」と叫びたいのは私自身だったが、

ここは母親として毅然と対処しなければ！体中の「平靜さ」を掻集め、キツと前方を見据えようと、私は全神経を「弁天」に集中させた。行く先々で弁天への行き方を問いつづけ、電車を何度も乗り換えて、疲れて眠る娘二人を抱きかかえ、やつとの思いで辿りついた弁天さん！そこで私が目にしたものは、「やつと会えた！」と涙を流す夫、ではなく、無情にもシャッターを降ろし、ガランと静かな港の風景だった。

夕闇迫る見知らぬ街角。虚な目で見渡すと一台のタクシーが目止った。幸い母娘で一泊するくらいのお金はある。最後の力を振り絞り、平常心に号令をかけながらそのタクシーに近付いた。四十才前後とおぼしき優しいようなドライバーだ。「すみません。この近くのホテルまでお願いできませんか？」少し怪訝そうにこちらを向いたその人は「ホテル：ですか？」首を傾げて考えた。目を擦りながら「おうちはおうちは？」と繰り返す娘達を座席に座らせ乗り込むと、「うーん…ホテルね

え…」とドライバーはゆっくりと走り出しながらまた呟いている。「近い所ならどこでもいいですよ」と畳み掛ける私に「そうですね、どこがいいかなあ」と走りながらまだ考えている様子だ。山の中でもあるまいに、そんなにホテルが皆無なのか？それともありすぎて迷っているのか？と何か釈然としないまま、車は町中を抜けていく。娘達はお菓子の袋を握り締めたままぐっすり眠ってしまった。とりあえず、私はこれまでの経緯をそのドライバーに説明し始めた。主人とスレ違ってしまったこと、高速艇の港に辿りついたけど間に合わなかったこと、明日一番で帰るしかないこと、等々。するとその方は「今からでも西宮からフェリーが出てくるから、それで帰られたらどうですか？」とアドバイスしてくれた。あ、そんな手があったのか。「その方が助かります。ではフェリー乗り場までお願いします。」「ハイ。分かりました」と、少し明るい声になったその人は、それからの道中、思いがけない言葉を発した。「実はですね…」最

初に私と目が合った時、ただならぬ形相をしていたらしい。「これは…」とその方の脳裏に浮かんだのは「親子心中」の四字。必死で平静を装ったつもりなのに「必死」の方が前面に出ていたのだ。思わず笑ってしまった私に「いやあ、これはこのままホテルに直行したらマズイと思って…事情が分かるまで時間稼ぎしました」と和やかに打ちあけてくれる。誤解とはいえず、その真心が身に染みた。

フェリーを降りて、無事に我が家に着いたのは夜中の二時。明け方、黒電話が鳴った。夫からだ。何と帰りの便は新幹線だったと言う。夫は梅田駅の最終電車まで私を捜したが、あきらめて岡山で一泊したとか。お互いの確認不足が招いた前代未聞の「珍道中」。

あの親切なドライバーさんと交した年賀状は二十通を超える。昨年「退職しました」というひとことが添えられていた。

改めて「ありがとうございます」とお伝えしたい。

丑に引かれて善光寺参り

宮本富夫

(高松大学 名誉教授)



幼い頃、祖母から聞かされた「丑に引かれて善光寺参り」。「丑に引かれて」に妙に心惹かれ、六十年近く私の心のすみに住み続けている。いつの日か善光寺を訪ねたいと思いつつも、なかなか縁を得ることかなわなかった。家内に言わせると私の生活は、仕事最優先の毎日であるらしい。そんな日々を見かねたのか、善光寺参りを企画してくれた。家内は丑年の生まれ、期せず、丑に引かれて善光寺参りという展開に。

長野へは、東京から長野新幹線で向った。途中の上田で、隣の座席の私より少し年配の方に肩をたたかれ、真田幸村の居城である上田城を教えていた。車中から眺めると、徳川秀忠が関ヶ原へ赴く途中、三万八千の戦力で攻めあぐねたというイメージを感じさせない、質素なやさやかな感じの城であった。聞けば、奥は深く、広いという。真田軍の戦力は徳川軍の約十分の一であったという。昌幸、幸村父子の知力の広さと深さがいかほどかと想像

させられた。

長野駅から善光寺への道は、丑にひかれ、歩くこととした。地元の方から教えられ、常夜灯に沿って歩く。こちらの常夜灯は木で造られていた。しかも木の香りが漂ってくるのではないかと感じさせる、初々しいものだった。ナビはほとんど家内に任せ、途中、入りたくなつたお店等をたずねながら、門前町の参道を進む。最初に眼にとまつたのが信州みそのお店、糍屋本店。

糍の字が懐かしく、家で味噌を作つていた頃のこと、大豆を煮る大鍋、吹き上がる湯気と大豆の香り、大豆と糍と塩を石うすでつく母の姿等が、頭の中に蘇る。糍屋さんへ糍をもらいに行くのは、自転車操縦ができるようになった子どもの役目だった。糍屋さんで見かけた、蓆の上に並べられた糍、特有の香りと雰囲気、あふれる生と温かさ、ともにいいものだった。懐かしい字を一つ見るだけで、懐かしい世界にタイムスリップ、不思議な気がする。

蕎麦を食べようということで戸隠し蕎麦の「山故郷」へ。開店と同時におじゃまし、家内は蕎麦三昧、私はキノコ蕎麦をいただく。新蕎麦の香りと味を楽しむ。何種類かのキノコの味もよかつた。久しぶりのいい味を堪能。この味はうどんの地では味わうことかなわないかと顔を見合わせた。当初の計画では、お昼に「兄部坊」という宿坊で精進料理をいただく予定だった。ナビ係の予約忘れて、縁を得ず。おかげで、おいしい蕎麦をいただくことに。

こんなわけで宇治万福寺の普茶料理、高野山の宿坊でいただいた精進料理と比較する機会が先送りとなる。精進料理との最初の出会いは、集落内で不幸があつた際に、同行の方が用意してくれるものであつた。豆腐と油揚げに醤油ベースの汁ものは、素朴ながら、心に残る味わい。集落内の不幸は歓迎されないが、時折、無性に食べなくなる。次の出会いは、西芳寺の住職をされている水口さんから「珍しいものだから、どうぞ」と、いただいた

折りだつた。精進料理が詰められている。素材の味が見事に生かされ、素朴さと自然を感じさせるいい味であつた。こんな世界があるのかと、関与された人たちの叡智に感服。いつか、高野山をたずね、味わいたい。そして、いろいろな地域の精進料理と縁を得ることを願つた。願えばかなうもので、その後、万福寺の普茶料理、高野山宿坊の精進料理等といくつか機会を得た。

次に足を止めた場所は、「ばていお大門蔵楽庭」飲食店や雑貨店が並ぶ蔵のまち博物館の様相。聞くと、江戸中期に建てられた蔵屋敷群を改装したものだという。段差を利用した路地風の通路に庭と蔵の組み合わせ。そんなに広くない空間ではあるが、そぞろ歩きと味を楽しめる。その一角にあつた寒天を材料にした食品を扱うお店に立ち寄る。寒天とは四十年にわたる付き合い。しかも信州産の寒天と。実験材料の餌の一部に使ってきた大切な一品。伊豆で採集されたテングサが信州に運

ばれ、信州の厳しい冬を利用して、露地で乾燥され寒天になると、その昔聞かされた。暖冬で寒天が品不足になり、ドギマギさせられたこともあった。このお店では、ヒトの健康を守る健康食品として生かされている寒天の新しい世界が展開していた。

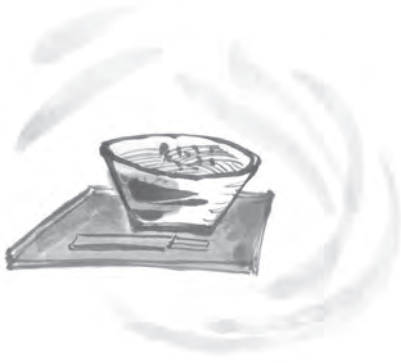
今回の信州行には、今年収穫されたクラカケ豆とその栽培方法を入手するという目的もあり、八百屋らしきお店にも何件か立ち寄った。しかし、縁を得ることかなわなかった。

そんなこんなではあったが、仁王門に至る。仁王門は一九一八年の再建。「定額山」の額がかかげられ、巨大な仁王像が立っておられた。大きく、力強い。迫力に圧倒される。高村光雲、米原雲海の作とか。国立博物館にある「老猿」が思い浮かんだ。

山門には「善光寺」の額。善の一字が牛の顔に見えると言われ、「牛に引かれて善光寺参り」の信仰が生まれたとか。謎は解けつつある気持ちになったが、不思議の感を否めない。二つの

門、ともに実に大きい。

年間六〇〇万人の参詣者を迎えると言われる本堂に到着。大きい、そしてあたたかく包まれる雰囲気を感じる。懐かしさと優しさ、どこから来るのかわからないが、実に心地よい。再建されてからでも三百年近い時の流れを経るという。この間に人々がささげた、心こもる祈りがもたらすものだろうか。ゆつくりと留まりたい気持ちにさせられる。内陣へ進み、祈りをささげる。そして「お戒壇巡り」で、ご縁を得る。久方ぶりの心穏やかな気持ち。ご縁を得たことにただ感謝。一生に一度は「善光寺参り」といわれることが、少しわかりかけた。何かに引かれるように境内を散策。線香を求め、善光寺を辞した。おかげで亡き母の七回忌に善光寺の香りをいただくことがなった。



王子稲荷神社と装束稲荷



郡 順 史

「先生、東京駅からだと二十分足らずの近さなのですね」

王子駅に降りると、助手のH君が飛鳥山を見上げ、話し掛けてきた。

「たしかに。でも電車のない昔の人々にとって
は、王子は江戸のはずれ、という感覚だよ」

「なるほど、そうすると今のような賑やかさは
なかったんでしょうね」

「いや、それが違う。将軍のお膝元からの適度な距離というのが、王子の面白いところだ」

八代将軍吉宗が鷹狩りの折にたびたび訪れていた飛鳥山を、出身の紀州ゆかりの王子権現社（現在の王子神社）に寄進した。そしてたくさんの桜を植樹。将軍家墓所の鎮まる上野山は武士のための節度ある花見の場所であったが、飛鳥山は江戸庶民に開かれた宴会や仮装など何でもアリの一大行楽地として栄えていく。

また近くを流れる音無川には王子七滝や金剛寺の紅葉など風光明媚な景勝があり、多くの茶屋も作られて、これまた庶民の遊び場所だった。季節を楽しむ江戸っ子にとって、春は桜、秋は紅葉と、王子は日帰りで行き来できるうってつけの近さにあった。

とはいっても江戸郊外。「本郷もかねやすまでは江戸のうち」というように、日光御成街道は本郷を出発点として、王子は「江戸のそと」になる。当時はずいぶんのんびりとした田園風景が広がっていただろう。だからこそ落語「王子の狐」が作られるように、狐が里にまで現れていても不思議ではなかった。

では狐に会いに、王子稲荷に行ってみよう。

二

「王子の狐については僕に説明させてください」

「そうだった、君は落語好きだった。では伺おうか」

「はい」

王子稲荷に参詣した男は帰り道に、一匹の狐が樹の陰で女に化けるのを見かけます。「ははあ、俺を化かす気だよ。化かされるくらいならこちらが化かしてやれ」と男は女にこちらから声を掛けます。

「玉ちゃんじゃない」

「あら兄さん」

「どうだいせっかくここで会ったんだ。あたしが奢りますから、この近くの扇屋で一緒におつなものでも食べに」

料理屋の二階に上がると、男は女に酒を勧めま

す。すっかり出来上がった女は、すやすやとそのまま横になってしまいます。男は「勘定は女が払う」と、自分はお土産まで持って先に帰ってしまいます。

しばらくして店の者に起こされた女は、男が何も払わずにそのまま帰ったことを聞かされ驚きます。吃驚飛び上がると耳も尾も出て、正体を現してしまいます。これを見て逆に腰を抜かしたのが店の者。箒などを持ち出して、狐に戻った女を追い出します。

帰った男は、友人に狐を化かしてやったことを自慢します。友人はそれを聞いて、「狐は執念深いから、仕返しにくるぞ」と忠告します。自分の仕出かしたことにすっかり怯えた男は、翌日また王子までやってきました。

稲荷神社の奥にある巢穴に来ると、その前で遊んでいた子狐に「昨日は悪いことをしました。お詫びします」と手土産を投げつけ、すつとんで帰ってしまいます。

穴の中では母狐が、昨日の追い回された痛みに唸っています。子狐が運んできた手土産を恐る恐る開けてみると、中身ははた餅がぎっしりつめられています。

「美味しそっだね」

子狐が手を出そうとすると、母狐があわてて止めます。

「食べちゃいけないよ。馬の糞かもしれない」
普通は人間を化かすはずの狐が、人間に騙されるというのがとても滑稽な落語です。

「今では狐を見かけることはなくなっただけど、昔は人間と狐が近い関係をもっていたことがよくわかるよ」

日君の話しを聞き終えると、いなり幼稚園の前に来た。稲荷神社に上がる急な階段は幼稚園の中を通っている。真夏の陽射しを背で受け、汗をたらしながら一段一段登っていくと、小高い丘の上にお稲荷さんは鎮座しており、涼しげな霊気と鎮守の森を抜ける風が体を冷ましてくれる。

三

王子稲荷神社は、もともとは岸稲荷として今から一千年前からこの地にあったという。荒川から運ばれた物資はこの岸町（現在も地名が残る）で荷揚げされ、移し替えられていたようだ。だから今でも氏子というべき稲荷講には、上流にあたる秩父の人達がたくさんいるという。

この地を支配していた豊島氏が元亨二年に紀州の熊野新宮の波王子より若一王子宮を勧請し、王子権現として奉斎したところから、辺り一帯の地

名が王子と改められ、それに伴い社名も変わった。

社記に「康平年中、源頼義、奥州追討の砌り、深く当社を信仰し、関東稲荷総司と崇む」とあるように、関八州稲荷の頭領として高い社格を誇る。

由緒書によれば「徳川代々の將軍の崇敬は、極めて篤く、社参は勿論、三代將軍家光公は、寛永十一年に、社殿を造営し正遷宮料として全五拾両、その他書諸具一式を寄進せられ、次いで五代將軍綱吉公は元禄十六年に、十代將軍家治公は天明二年に、それぞれ、修繕を寄進されましたが、更に、十一代將軍家齊公は文政五年に、社殿を新規再建されました」という。

朱塗りの社殿はまことに華美で、本殿の天井には流麗な鳳凰の絵図が掲げられている。以前は江戸幕府の御殿絵師の谷文晁の竜の板絵が飾られていたが、今は境内の史料館に収められているのである。

この史料館には同じく珍しいものとして、日本画家、蒔絵師として著名な柴田是真作の「顔面著色鬼女図」もあるそうだが、正月三が日と二月初午の日だけに公開されるので、残念ながら見ることはできなかつた。

説明によると凡そ縦一九〇cm、横二四五cmの巨大な絵馬で、酒吞童子の家来である茨木童子が化

けた鬼女の姿が描かれているようだ。この絵は見
た者の心を奪う凄みと美しさがあり、柴田是真の
名を一躍高める切っ掛けになったという。

歌舞伎でも演じられる「茨木」を簡単に説明し
よう。

源頼光の家臣渡辺綱は、女に化けた茨木童子の
退治に出かけ、その女の片腕を切り取る。綱は、
切り取った鬼の腕を源頼光に見せた。頼光が陰陽
師に相談したところ、「必ず鬼が腕を取り返しに
やって来るから、七日の間家に閉じこもり物忌み
をし、その間は誰も家の中に入れないように」と
言われた。それから数日間、茨木童子はあらゆる
手を用いて綱の屋敷へ侵入しようとするが、綱の
唱える仁王経や護符の力で入ることができなかつ
た。

ついに七日目の晩になって、摂津の国から綱の
伯母が屋敷にやってきた。綱は事情を話し決して
伯母を屋敷に入れなかったが、年老いた伯母は「幼
いころ大切に育てた報いがこの仕打ちか」と嘆き
悲しむ。綱は仕方なく言いつけを破り、伯母を屋
敷に入れた。

伯母は、綱が切り取ったと言う鬼の腕を見たい
と言い、封印された唐櫃から出されてきた腕を手
にとつてじつくり見ていると、突然、伯母は鬼の

姿になった。この伯母は実は茨木童子の化けた姿
であった。そして腕を持ったまま飛び上がり、破
風を破つて空の彼方に消えたという。

この絵を納めたのは住吉の砂糖商人の同業者組
合。なぜこんな不気味な絵を描かせ、そして奉納
したのか、読者は不思議に思うでしょう。実は当
時、天保の改革による各方面の肅清をしていた江
戸幕府によって、組合は砂糖の専売権を奪われて
いた。伝説になぞらえ専売権を取り戻したいと祈
願してこの絵を納めたもの。この直後に願いが
叶ったというが、ご利益の有難さとともに、江戸
商人の逞しさと粋な心が伝わってくる。

神社に話しを戻すと、御祭神は、宇迦之御魂神、
宇氣母智之神、和久産巢日神の三神。この神様た
ちは稲荷大明神や、お稲荷さんと呼ばれ、庶民に
広く愛され信仰されてきた。本来は穀物・食物な
どの農業の神様であったが、中世にはその加護は
広く産業全般に渡るものとして信じられお祀りさ
れている。

お稲荷さんが江戸で大人気になったのは出世稲
荷の影響が大きい。田沼意次が紀州藩の小姓から
老中にまで出世したのは屋敷に稲荷が祀つてあつ
たからという評判が広まり、居宅に小祠をもうけ
稲荷を勧請する武家が多くなった。これが庶民に

広がり稲荷信仰が大層盛んになった。

そのため「伊勢屋、稲荷に犬の糞」と言われたほどに、江戸町内には「お稲荷さん」が多い。一つの町に少なくても一社、多いところは二、三社あったという。大名や旗本の屋敷の邸内に屋敷神として祀られているものも含めると、数千では下らないかもしれない。江戸庶民にとつては、出世というよりもっと身近に自分たちの商売繁盛を願っていたそうだ。

「お稲荷さんというと、乃木大将も信仰篤かったと聞きますが」

「そう、そのお稲荷さんというのがこの王子稲荷なんだ。乃木夫妻とその両親は王子まで月参りをしていたぐらい、熱心だったんだ。東京大空襲で社殿を焼失した乃木神社が、戦災からの復興を願って、昭和三十七年に王子稲荷から分霊して乃木神社境内に赤坂王子稲荷神社として創立している」

王子稲荷のご神徳と言えば、商売繁盛だけでなく忘れてならないのが、火防せ。江戸の町は本当に火事が多かった。というのも江戸には諸国から多くの人が集まって、世界に類をみない過密都市であったという。

江戸時代は、身分によって武家地、寺社地、町

人の住む町地とはつきり区別されていた。江戸の町の総人口の半数は町人でありながら、武士や寺が広大な敷地を有しているのに対して、住むことが許された土地は少ない。そうなるも当然町地は人口密度の高い、過密地域となる。その過密ぶりは、路地裏までびっしりと長屋がつまっているといわれるほどで、こうした町地にひとたび火災が発生すれば、火は止まることなく延焼拡大したであろうことは想像に難くない。

二百六十年に及ぶ江戸時代における大火の発生は、約九十件と記録されている。三年に一度は江戸の町の大半が焦土と化するような大火に見舞われたというのだから、当時の人々にとつて火災除けは切なる願いであった。火事にあつて家と家財道具を失えば、今とは違って保険が降りるわけでもなく、これまでの身代が文字通り灰と化するのである。

王子稲荷では二月の初午の日に「火防守護の風守」を頒布しているのだが、これが江戸の町人に大いにうけた。「火事も隣で居成り」と駄洒落は言ったのかどうかはわからないが、この風を祀れば火事に遭わずに息災繁盛するという。風守は奴さんの形をしていて、これが火消しの印半纏と結びついたとか、風が風を切り大火を防ぐという

か、諸説はあるらしい。参拝の者を見込んで、多くの露天が門前を賑やかせ、縁起の風を商う風事も開かれるなど、現在にも続く風物詩として残っている。

四

「先生、こんなパンフレットが置いてありました」

日君が社務所から頂いてきた案内書には

「王子 狐の行列」と書かれている。

「この近くに大きな榎があったそうだね。毎年大晦日の夜、関東各地から集まって来た狐たちが榎の下で衣装をあらためて王子稲荷神社に参詣したといういつたえがある。名所江戸百景の一つにも入っているよ」

「へー、不勉強で見たことがありませんが、さぞや幻想的なのでしょうね」

「これは素晴らしい浮世絵です。後で調べてみなさい」

せっかくなので駅への帰り道をちよつとだけ迂回して、昔、その大木があったという装束稲荷神社へ寄ってみる。

街中にひっそりと佇んでおり、王子稲荷とは比べようもなく小さなお社だが、隅々まで清掃が行き届いている。

江戸から離れたこの場所は、夜も遅くなると月明かりしかなくなる。一面の暗闇の中に、ぼつりぼつりと赤い玉が動く。集まった狐たちがともす狐火だ。この狐火の多少を見て、近在の農民は翌年の豊作の吉凶を占ったという。

この装束稲荷に地元の人には特別の思い入れがある。それは次の事情からだ。

昭和二十年四月十三日、王子・赤羽などの城北地区を目標とした米軍による大空襲は、焼夷弾という卑劣な手段を使用して、家屋を大火災に巻き込む。しかし、ここで一つの奇跡が起きる。猛烈な勢いで東南より延焼して来た火災はこの神社で完全に止まり、西北一体の住民は火難から救われたのだ。

ご利益は昔の話ではなく、現代にもあるのだと改めて感得させられた。もちろん地元の人々はそれ以来一層に神恩感謝して、境内を整備し、お祀りつづけてきた。

平成五年からは地元の有志の方々の真心と努力によって、王子の狐火を再現しようと「狐の行列」が始められた。この装束稲荷から王子稲荷までの道を狐のお面を被ってお囃子とともに練り歩くのだそうだ。

これが単なる思い付きや真似できないところ

が、偉い。実行委員の方々によると「王子の名物、狐の行列は第十五回を機に、それまでややもすると仮装行列イベントになりがちだったのを改め、はじめのころの本来の『祈りの狐』をテーマとする王子稲荷神社初詣にふさわしい 装束稲荷除夜詣発、初詣・祈りの狐の行列づくりに取り組むこととなりました」という。

個人が楽しむ仮装ではなく、神仏への謙虚な姿勢と自分たちの伝承を守っていかうという精神に、筆者は日本人の美徳を感じます。安易に行事だけを復活するのではなく、「祈り」という心を込めているところを他町も見習うべきです。

行く年に感謝、来る年に祈りの除夜詣、初詣。どうですか、行ってみたいくなるでしょう。

「先生、大晦日にはまたご一緒しましょう」

「そうだね、そのときはまた連れて行ってちょうだいね」

— 以上 —



(表紙説明)

■ おいり

おいりは5色が主流。山下おいり本舗のおいりは7色あり、春は桃色、新緑の頃は緑、秋は橙と、季節によって色の分量を少しずつ変え季節感を大事にしている。

山下おいり本舗

所在地／香川県三豊市高瀬町新名字天古

一〇一八一二〇

TEL／〇八七五―七二―五四三八

FAX／〇八七五―七二―五四五一

「酒林」随筆特集 第八十六号

平成二十五年十一月一日発行

発行人 西野 信也

印刷人 株式会社 太陽社

発行人 西野金陵株式会社

高松市魚井町二番地八

万一乱丁・落丁がありましたら、ご一報下さい。

西野金陵株式会社



■酒類部各事業所

- 〔本店〕
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
- 〔高松本社〕
〒760-8544 香川県高松市亀井町2-8 ☎087-835-4133
- 〔高松支店〕
〒760-0064 香川県高松市朝日新町33-40 ☎087-851-4133
- 〔丸亀支店〕
〒763-0083 香川県丸亀市土器町北1-70 ☎0877-23-4133
- 〔徳島支店〕
〒770-0944 徳島県徳島市南昭和町3-53-4 ☎088-653-4133
- 〔松山支店〕
〒790-0925 愛媛県松山市鷹子町546-1 ☎089-975-4133
- 〔岡山支店〕
〒701-0221 岡山県岡山市南区藤田錦564-209 ☎086-296-2136
- 〔洲本支店〕
〒656-0012 兵庫県洲本市宇山3-5-28 ☎0799-22-0788
- 〔大阪営業所〕
〒565-0824 大阪府吹田市山田西2-1-14 ☎06-6877-2671
- 〔東京営業所〕
〒134-0083 東京都江戸川区中葛西4-6-12 ☎03-3686-4133
- 〔観音寺物流センター〕
〒769-1613 香川県観音寺市大野原町花稻1071-1 ☎0875-56-3133
- 〔多度津工場〕
〒764-0028 香川県仲多度郡多度津町葛原1880 ☎0877-33-4133
- 〔琴平工場〕
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
- 〔金陵の郷〕
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133

■化学品事業部各事業所

- 〔大阪本社〕
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2444
- 〔大阪支店〕
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2447
- 〔東京支店〕
〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-9-4 西野金陵ビル9F ☎03-3552-3427
- 〔名古屋支店〕
〒450-0002 名古屋市中村区名駅4-26-13 ちとせビル5F ☎052-561-5531
- 〔北陸営業所〕
〒918-8231 福井県福井市問屋町3-815 和中ビル1F ☎0776-24-0967
- 〔上海西野貿易有限公司〕
中国上海浦東外高橋保税区基隆路6号 ☎+86-21-6278-9548
- 〔NISHINO KINRYO (THAILAND) CO.,LTD.〕
159/40 Serm-Mitr Tower 26th Fl. Room No. 2606, Sukhumvit 21 (Asoke) Rd. Kwaeng
klongtoey-Nua, Khet Wattana, Bangkok 10110 ☎+66-2-661-7014

〔PT. NISHINO KINRYO INDONESIA〕

- Sampoerna Strategic Square South Tower Level 30 Room No.6 Jl Jend.
Sudirman Kav 45-46, Jakarta 12930 INDONESIA ☎+62-21-2993-0822



西野金陵株式会社
四国・琴平